

ドイツの音楽科カリキュラムにおける学校種間の差異に関する研究

—Baden-Württemberg 州を事例として—

中島卓郎 芸術教育講座 (音楽教育分野)

中島奈穂子 長野県短期大学

キーワード: ドイツ, 学校種, 音楽, カリキュラム

1 研究の目的と方法

本研究の目的は、ドイツの伝統的な3つの学校種、すなわち基幹学校(Hauptschule)、実科学校(Realschule)、ギムナジウム(Gymnasium)における音楽科カリキュラムの差異を明らかにするところにある。

研究の方法は、調査の対象をバーデン・ヴュルテンベルク(Baden-Württemberg)州の「教育プラン(Bildungsplan)ー音楽ー」¹⁾とし、比較の対象を、各学校種の目標(教育とその使命, Der Erziehungs- und Bildungsauftrag, 以下「目標」と記す)、指導内容、およびその展開方法として、それぞれの差異を明らかにする。なお、比較をおこなうための抽出学年は、各学校種の初年度にあたる第5学年および第8学年を中心とし、水平的に考察する。

2 ドイツの学校制度

1990年に再統一された現在のドイツは、16の州(旧西ドイツが11州、旧東ドイツが6州)から構成される連邦国家であり、各州の事情に応じてそれぞれ独自の教育政策を打ち立てている。学校制度に関しても州によって若干の差異があるが、標準的な学校制度は図1のとおりである。

まず、すべての子どもに共通の「基礎学校」は、通常4年制であり、基礎学校を終えた子どもたちは、その資質・能力や適性に応じて、3種類の中等学校のいずれかに進むことになる。これが、中等教育における伝統的な三分岐制度であり、ドイツの学校制度の大きな特色となっている。3つの中等学校は、卒業後に就職して職業訓練を受ける者が主として就学する「基幹学校」、それよりも程度の高い普通教育を行う「実科学校」、大学進学希望者が主として就学する「ギムナジウム」というように、それぞれが独自の性格、色合いをもっている。²⁾

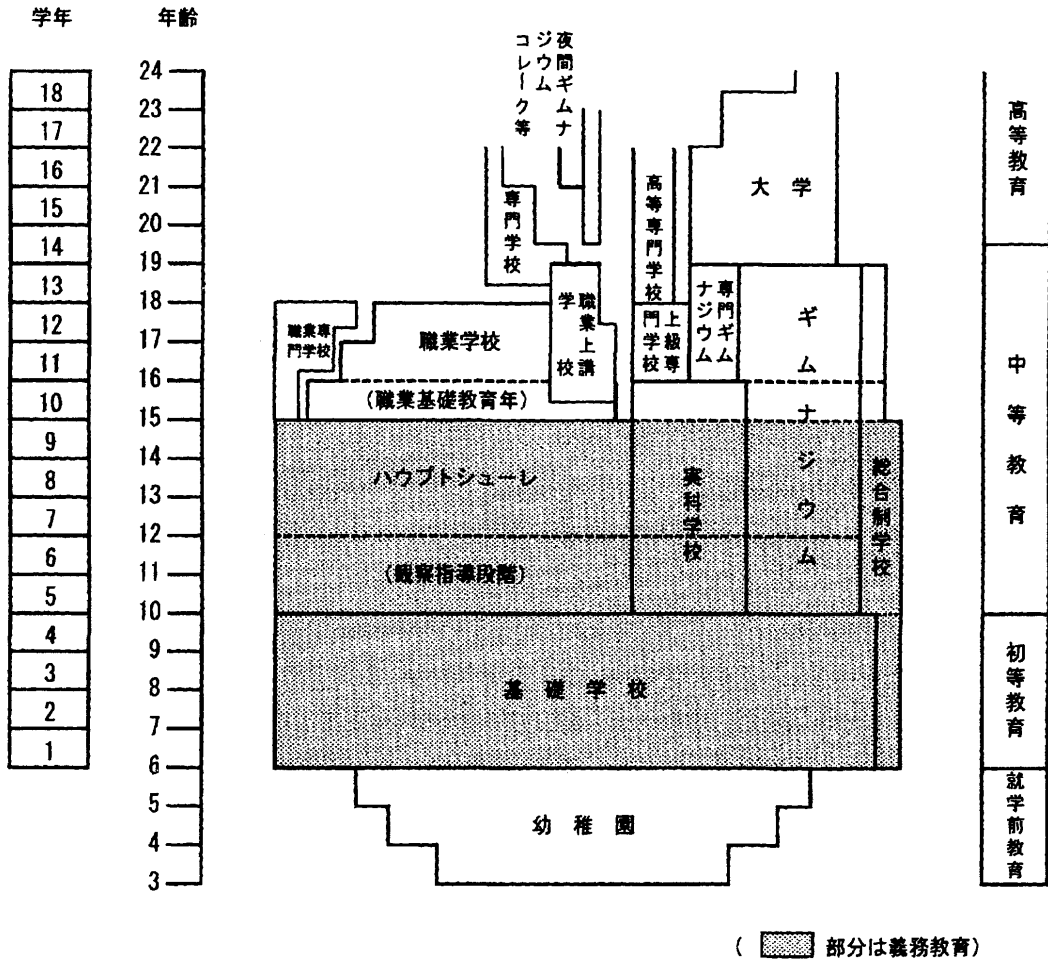
3 音楽科カリキュラムの内容とその比較

(1) 「目標」とその比較

3種の学校は、それぞれに全学年を通した「目標」を教科ごとに掲げているが、ここでは音楽科のそれをそれぞれ比較し、考察を行った。

①共通点 それぞれに共通するものとして次の5点が考えられる。

i) 社会的な役割 どの学校種も共通して音楽教育のもつ社会的な意義についての記述がある。基幹学校では、「歌唱や音楽することにおいては、他者との出会いがあるため、社会的融合を促進する。音楽は、出身地や言葉の違う人々を結びつける。」とされ、実科学校では、「音楽の授業と、合唱、オーケストラ、ダンスグループなどのグループ活動は学校生活の形成に重要な役割を果たしている。(中略)後の音楽活動に刺激を与え、さまざまな民族を結びつける考え方を促すことで教育全体に貢献するのである。」と記



文部科学省生涯学習政策局調査企画課、『諸外国の初等中等教育』、平成14年1月より

図1 ドイツの学校制度

されている。これらは、ギムナジウムにおける「音楽教育にはまた、学校生活を形成する上で重要な貢献がある。合唱・合奏は学校内での仲間づくりに役割を果たす。音楽会などを準備し、実行することは生徒の積極的な参加を促し、また重要な社会的行動様式の訓練にもなる。」となっており、共通するものと考えられる。

ii)活動領域(Arbeitsbereich)の相互関連の強調 「歌唱・音楽すること(Singen und Musizieren)」や「音楽聴取(Musikhören)」の活動領域や、音楽的知識というものを常に相互関連させながら、授業を進めていく必要性が指摘されている。基幹学校では、「歌唱・音楽すること・音楽聴取は、別々に実践するのではなく、常に互いに組み合わせられる。」とされ、「音楽的な基礎知識は歌唱・音楽すること・音楽聴取との密接な関係においてのみ習得され…(実科学校)」、「能動的に演奏すること、身体的、感性的な音楽の知覚、聴く喜び、そして知的に理解、消化することを交互に行うことが条件となる。(中略)音楽理論は決してそれ自体を目的として理解されるべきではない。(ギムナジウム)」のように、相互に密接に関連させた学習の重要性を強調している。

iii)音楽と他教科、特に「動き」との関連の指摘 ドイツの音楽教育の特徴として挙げられる音楽と「動き」の学習についての記述が認められる。基幹学校では、「目標」の冒頭部分に、「動き」や「理解して聴くこと」といった積極的な音楽とのかかわり」の重要性が記されており、実科学校の「演劇・舞踊の

形で歌を表現すること」や「歌唱・音楽することの活動領域では発声法、器楽奏法の学習に加え、動きやその他の表現領域との結びつきを包括している。(ギムナジウム)」と共に、音楽教育における「動き」との関連学習を重要視していることがわかる。また、「地理」、「ヨーロッパと他の大陸について」、「地域研究・郷土史」など、教科間を結びつける学習についても触れられている³⁾。

- iv)「音楽を理解すること」の重要性 音楽を理解することに関して、3つの学校種のすべてにおいて、「目標」の冒頭部分にその重要性が記載されている。「情緒面の体験のみならず音楽への理解も育てなければならない。(基幹学校)」、「音楽的知識を伝え、よく考えて判断することや評価する能力を育成せねばならない。(実科学校)」、そしてギムナジウムも「歌唱・音楽すること、舞踊と聴取の能力を育成し、創造的表現で音楽と取り組む喜びを促すことで、音楽を理解し判断する基準が生まれる。」、とされているのである。
- v)音楽への関わり方の育成 「音楽教育は、生徒の音楽的環境をさまざまな形で広げるものである。…音楽的環境を広げる手助け…(基幹学校)」、「音楽教育は音楽への喜びを呼び覚まし、生徒の音楽的興味や体験能力を育成する使命がある。(実科学校)」、そしてギムナジウムでは、「音楽教育は初期の段階から個性と価値観の育成において重要であり…(中略)、他人の音楽的嗜好に対する開かれた理解を育て、さまざまな音楽の中から賢明に、美的感覚に基づいて選択できるように指導せねばならない。」とされている。これらは指導内容が生徒の実生活に生きていくことを重要視し、同時に指導者の美的感覚や嗜好による指導内容の偏りが生じにくくなるような記述となっていると考えられる。

②相違点

前節で指摘したとおり、各学校種の「目的」の方向性については大きく分けて5つの点で一致が見られ、大きな差異はなかった。しかしながら、「目的」の記述における専門的な用語の出現度には明らかに違いが認められる。すなわち、基幹学校→実科学校→ギムナジウムの順に、専門的な用語の使用頻度が増している。例えば、基幹学校では専門的な用語はほとんど現れず、実科学校では、「発声訓練」、「歌詞や旋律をよく考えて歌とかかわること」や「歌の背景にあるもの」、「歌曲伴奏」、「楽器学」、「楽式論」などが記され、ギムナジウムでは、「音楽的用語を専門的に使う」、「身体的感性的な音楽の知覚」、「発声法、器楽奏法」、「音楽的特徴の関連」などの専門的な用語が使われている。

(2)指導内容とその比較

①指導内容の区分

基幹学校、実科学校は「歌唱・音楽すること」と「音楽聴取」の2つの活動領域である。ギムナジウムの第5－7学年は「歌唱・音楽すること」と「音楽知識の応用(Angewandte Musikkunde)」と「聴取・理解(Hören und Verstehen von Musik)」の3領域で、第8－13学年は題材・単元(Lehrplaneinheit)が設定されている。(表1および3参照)

②指導内容

この教育プランにおける指導内容の表示方法としては、上位項目、中位項目、下位項目およびその細目内容となっている。指導内容を比較するにあたり、ここでは各学校種の第5学年と第8学年における上位～下位項目の提示(表1および3参照)と、上位項目の比較(表2および5参照)を行った。細目内容は表には示さず、上位～下位項目の比較・考察において補助的に本文中に引用しつつ進めていくこととする。なお、週当たりの音楽科の時間数は第5学年で基幹学校と実科学校が2時間、ギムナジウムが3時間であり、第8学年はどの学校種も1時間である。

表1 第5学年の指導内容

*()内は中位, []内は下位項目

	歌唱・音楽すること	音楽聴取	
基幹学校	<ul style="list-style-type: none"> さまざまなテーマにおける歌曲 暗譜による歌唱（歌詞、旋律、声と器楽の表現、歌曲での発声訓練） 記譜された音楽の演奏 音楽と動き（簡単なダンスの形式、音楽にあわせた自由な動き） 音の表現（経過句、音楽以外の現象） 音楽の形成方法と表現（音量、リズム、音高、音程、音列、経過句） 	<ul style="list-style-type: none"> 環境音楽（生徒たちの身近な体験から） 楽器（打楽器、木管楽器、簡単な楽器の構造） 音楽とプログラム（情景、物語、絵画） 音楽と作曲家（音楽の多種多様性） 	
実科学校	<ul style="list-style-type: none"> さまざまなテーマにおけるドイツ語または他言語の歌曲（重要点：日常や年間におけるもの、旅とさすらいの歌、冗談やダンスの歌、故郷や方言の歌） 暗譜による歌唱 簡単な2声の曲 歌曲での発声訓練（呼吸法と発音法） 即興と表現（経過句をつくってみる、音楽以外の現象を表現、共同で計画して実行する） 学校の楽器と正しく親しむ 記譜された音楽の演奏（図形譜や通常譜による簡単な歌曲と器楽曲の演奏） 音楽と動き（簡単なダンスの形式、様々な分野のダンスの基本としてのステップやレパートリーを取り上げる、音楽にあわせた自由な動き、音楽的刺激に合わせた身体表現学習） 音楽の基礎知識（音符と休符[全音符から16分音符・付点音符]、拍子[2/4, 3/4, 4/4]、拍子をとること、弱起と強起、ト音記号の幹音、テンポ表示[アレグロ、アンダンテ、アダージョ]、強弱記号[ppからff、クレッシェンド、デクレッシェンド]、音階の基本としての全音・半音進行、簡単な例による長・短音階） <p>第9学年終了までにバロック、古典、ロマン派、20世紀の音楽の例と作曲家について扱うこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 環境音楽（様々な部門、ジャンル、時代様式より） 楽器（鉄琴・鐘、木管楽器、鍵盤楽器、様々な様式分野からの聴取と演奏の例、簡単な楽器の自作） 音楽とプログラム（絵画または動物の情景や自然現象） 音楽と作曲家（若干の作曲家の生涯と作品） 	
	歌唱・音楽すること	音楽知識の応用	聴取・理解
ギムナジウム	<ul style="list-style-type: none"> 地域と様々な言語圏、文化圏の歌 暗譜による歌唱 声の能力を伸ばす(脱力法、姿勢、呼吸法、明快な発音、柔らかい歌いだし、頭声、円唇母音、生きたアーティキュレーション) クラスの楽器 簡単な楽器の自作 楽器 楽器の斉奏 音による遊び—音と演技 表現手段としての音 音楽と動き 	<ul style="list-style-type: none"> 拍子、拍節、リズム、テンポ（音符[全音符から16分音符、付点]、休符、単純拍子と複合拍子における拍節の位置） 音階の基本（ト音記号の領域、ト音からハ音、5音音階、長音階の構造、ハ・ト・ヘ・ニ長調、オクターヴ内での全音音階） 3和音（協和音と不協和音） 音楽の記号（強弱、テンポ、アーティキュレーションとフレージング、構成） 	<ul style="list-style-type: none"> 自分と音楽の関係 環境音楽(メディアにおける音楽、場所・地域の音楽生活) 各時代の音楽家(生涯、固有の様式、社会的状況) 音楽と形式(基本的な形式の原則[緊張-弛緩、経過-突然の変化、同一-上昇-退行、反復-変容-対比]) 形式のモデル(3部形式の歌曲、多部形式、ロンド形式) 音楽と他の表現分野(音楽について語る、音楽と演劇、音楽と絵画[音楽的な図形、絵画からの音楽])

i)第5学年の比較 表1に指導内容における上位～下位項目を全て示した。まず、注目されることは記載されている量的なものである。基幹学校に対して実科学校やギムナジウムの記載量は、はるかに多い。上位項目数は、基幹学校10、実科学校13、ギムナジウムで20である。もっともこのことは、ギム

表2 第5学年の指導内容における上位項目の観点別比較

学校種 観点	基幹学校	実科学校	ギムナジウム
1. 歌唱教材	さまざまなテーマにおける歌	さまざまなテーマにおけるドイツ語または他言語の歌	地域とさまざまな言語圏、文化圏の歌
2. 歌唱	暗譜による歌唱	暗譜による歌唱 + 簡単な2声の曲	暗譜による歌唱
3. 発声	—	歌曲での発声訓練	声の能力をのぼす
4. 演奏	記譜された音楽の演奏 楽器	記譜された音楽の演奏 楽器 + 学校の楽器と正しく親しむ	楽器 クラス楽器 楽器の斉奏
5. 創作	音の表現	即興と表現	表現手段としての音 簡単な楽器の自作
6. 音楽理論	音楽の形成方法と表現	音楽の基礎知識	拍子、拍節、リズム、テンポ 音階の基本 3和音 音楽の記号 音楽と形式 形式のモデル
7. 音楽史	音楽と作曲家	同 左	各時代の音楽家
8. 音楽と他媒体	音楽と動き 音楽とプログラム	同 左	音楽と動き + 音による遊び - 音と演技 音楽と他の表現分野
9. その他	環境音楽	同 左	環境音楽 + 自分と音楽の関係

ナジウムでは他の2者に比べて週当たりの時間数が1時間多いことにも起因すると思われる。

次に、それらに関して観点を設けて比較してみた。表2にそれを示す。この表から、明らかに実科学校、ギムナジウムでは指導内容が多様化あるいは細分化されているのがわかる。例えば、観点1『歌唱教材』では、実科学校においては基幹学校では記されていない「ドイツ語以外の歌」を、ギムナジウムではさらに「さまざまな文化圏の歌」が扱われている。また、観点4『演奏』において、ギムナジウムでは「楽器の斉奏」が挙げられているが、他の2つの学校種ではそのような記載はない。観点6『音楽理論』においても、基幹・実科学校が、全体を包括するような語句の提示のみとなっているのに対し、「音階の基本」、「3和音」や「音楽の形式」など、ギムナジウムのそれは明確に示され、より専門的になっているのがわかる。

そして、さらに中位及び下位項目を比較することにより、前述のことは尚一層明白となる。たとえば、発声法に関する記述を見てみよう。基幹学校では「歌曲での発声訓練」のみであるが、実科学校では「呼吸法と発音法」、ギムナジウムにおいては「脱力法、姿勢、呼吸法、明快な発音、柔らかい歌いだし、頭声、円唇母音、生きたアーティキュレーション」と細分化され、より高度な内容となっているのがわかる。『音楽理論』に関しても、ギムナジウムのそれは、学習する調性の具体的な指示や「5音音階」、「協和音と不協和音」、「基本的な形式の原則[緊張・弛緩、経過・突然の変化、同一・上昇・退行、反復・変容・対比]」な

ど、細分化、深化した内容を扱っている。

- ii)第8学年の比較 全体的に第5学年に比べて内容量が減少しているのは、3つの学校種ともに週当たりの時間数が1時間へと減ったことによるものであると考えられる。まず、第8学年からはギムナジウムが題材・単元制をとっていることがもっとも大きな違いである。参考までに第8学年以外の題材・単元は、例えば「宗教声楽曲」、「交響曲」、「芸術歌曲」、「変奏曲」、「印象派」などがあり、西洋の伝統的な音楽を中心に高度に専門的な内容を含ませて取り扱っている。また、「地域の音楽」、「前衛音楽」、「ジャズ」、「ポップス、ロック音楽」や「映画音楽」、「商業広告における音楽」へと幅広いジャンルにまで広がっており、「音楽批評」や「演奏解釈の比較」等を含むテーマ学習も極めて特徴的となっている⁴⁾。

表3 第8学年の指導内容

*()内は中位, []内は下位項目

	歌唱・音楽すること	音楽聴取
基幹学校	<ul style="list-style-type: none"> さまざまなテーマ、言語圏、文化圏における歌曲(国歌) 暗譜による歌唱(歌詞、旋律、声と器楽の表現、歌曲での発声訓練) 記譜された音楽の演奏 音楽と動き(自由な、および限定されたダンス形式、台本、絵画あるいは情景の音楽的な表現) 	<ul style="list-style-type: none"> 音楽劇(歌詞、音楽、筋書き、演出) 上演に接するための準備 ポップス/ロック(効果と意義、典型的な表現方法、製作と商品化) ポップス/ロックンロールを聴きに行くための準備 楽器学(電気音響と電子楽器) 打楽器 他文化の音楽(多種多様性、生活との関わり) 各時代の作曲家と演奏家(数人の作曲家と演奏家の生涯と作品)
実科学校	<ul style="list-style-type: none"> さまざまなテーマにおけるドイツ語または他言語の歌曲(重要点:ポップスとフォークソング、スピリチュアルとゴスペルのレパートリーをより広くより深く) 暗譜による歌唱 歌曲での発声訓練 音楽と舞踊(社交ダンスの形式、その他のダンスの記述を動きに置き換える) 	<ul style="list-style-type: none"> 音楽と言語(オペラ、オペレッタまたはミュージカル/オペラは第8または9学年で履修義務、特徴的な情景、音楽による人の特徴づけの内容と方法、演技者の役割、職場としてのオペラハウス/劇場) ポピュラー音楽(ロック・ポップスの領域から2つの様式、グループとその聴衆、歌詞/メッセージ) 音楽と作曲家(これまで学習した以外の作曲家の生涯と作品)
ギムナジウム	題材・単元1	楽器学の応用
		<ul style="list-style-type: none"> 音響の基礎 楽器群ごとの響きの特徴 総譜と響き(総譜の体系、移調楽器)
		<ul style="list-style-type: none"> 作曲史における器楽アンサンブル(バロックのオーケストラ/コンチェルト grosso, 古典派のオーケストラ/交響曲, 吹奏楽, ビッグバンド, ジャズコンボ, ロックバンド/ポップス作品のアレンジ, 現代音楽の占める役割とその技術)
	題材・単元2	ポピュラー音楽
	<ul style="list-style-type: none"> 各国の民俗(様々な生活圏や文化の民謡と民族舞踊, 暗譜による歌唱, 様々な時代における芸術音楽への外国からの影響) ポップス, ロック音楽の由来と始まり(カントリー&ウェスタン, リズム&ブルース, ロックンロール, ビート) 現代のポップス, ロック音楽とそのプレゼンテーション 	
	題材・単元3	オペラ
	<ul style="list-style-type: none"> 台本とその原典 音楽表現(人物の性格描写, 状況描写, 重要なテーマとモチーフ, 特徴的な形式) 舞台での演技 公共機関としてのオペラハウス 	

表4 活動領域ごとの年間時間数の目安

学年	基幹学校		実科学校	
	歌唱・音楽すること	音楽聴取	歌唱・音楽すること	音楽聴取
5	30	26	32	16
6	28	24	32	16
7	14	10	25	23
8	10	12	10	14
9	8	10	10	14
10	6	10	16	30

表1と表3を比較してみると、記載されている量からみて、基幹学校と実科学校は共に第5学年は「歌唱・音楽すること」に、第8学年は「音楽聴取」に重点が置かれていることが分かる。またギムナジウムの題材・単元の内容をみても同傾向にあるといえる。したがって、このことは3つの学校種に共通する流れと捉えられる。すなわち、学年が進むにつれ、次第に演奏することよりも、聴いたり知識的なものを学習したりする時間へと移行していくのである。たとえば、基幹学校の第5学年における各活動領域の時間数は「歌唱・音楽すること」で30時間、「音楽聴取」で26であるが、第8学年では、それぞれ8時間、10時間と時間配分の割合が逆転するのである。教育プランに示されている活動領域ごとの目安としての年間時間数を表4にまとめてみた⁵⁾。なお、ギムナジウムは3つの活動領域の合計時間数として

表5 第8学年の指導内容における上位項目の比較

学校種	基幹学校	実科学校	ギムナジウム
1. 歌唱教材	さまざまなテーマ，言語圏，文化圏の歌	さまざまなテーマにおけるドイツ語または他言語の歌	—
2. 歌唱	暗譜による歌唱	暗譜による歌唱	—
3. 発声	—	歌曲での発声訓練	—
4. 演奏	記譜された音楽の演奏	—	—
5. 創作	—	—	—
6. 音楽理論	—	—	—
7. 音楽史	各時代の作曲家と演奏家	音楽と作曲家	作曲史における器楽アンサンブル ポップス，ロック音楽の由来と始まり 現代のポップス，ロック音楽とそのプレゼンテーション
8. 音楽と他媒体	音楽と動き 音楽劇	音楽と舞踊 音楽と言語	舞台での演技
9. 音楽に関する知識	他文化の音楽 楽器学 打楽器	—	音響の基礎 楽器群ごとの響きの特徴 総譜と響き 台本とその原典 音楽表現 公共機関としてのオペラハウス

記載されているのでここには掲げていない。この表からも上述したことは明らかである。このことは3つの学校種の前段階である基礎学校(Grundschule)における第1・2学年で、「歌唱・音楽すること」が22時間、「音楽聴取」が8時間であることから裏付けされる。また、表5は第8学年の指導内容における上位項目を比較したものであるが、ギムナジウムにおいて、自身が演奏することを学ぶこと(観点1～5)の記載はない。そして、中位項目を含めた内容は、楽器学の応用における「作曲史における器楽アンサンブル(バロックのオーケストラ/コンチェルトグロッソ, 古典派のオーケストラ/交響曲, 吹奏楽, ビッグバンド, ジャズコンボ, ロックバンド/ポップス作品のアレンジ, 現代音楽の占める役割とその技術)」や「オペラ」における「音楽表現(人物の性格描写, 状況描写, 重要なテーマとモチーフ, 特徴的な形式)」などのように、演奏することよりも知識・理解を重要視し、その指導内容はやはり第5学年と同様に、他の2者に比べてより細分化され、深化したものが扱われている。

4 まとめ

3つの学校種の「目的」においては、音楽教育の社会的な役割、活動領域の相互関連の強調、音楽と他教科との(特に‘動き’との)関連の指摘、音楽を理解することの重要性、音楽への関わり方の育成という点で共通性が見られた。「教育プラン」においては、各学年の活動領域ごとに、指導にあたって留意すべきこととして短い文章が添えられているが、それらもこの傾向と一致するものである。また共通性ということでは、学年が進むにつれ、歌ったり演奏したりすることよりも、聴いたり理解したりすることに重点が置かれていくことも注目に値するものであった。そして、これらのことは、3つの学校種における基本的な教育理念には大差はないということを示していると考えられる。

しかしながら、その指導内容の細分化と深化の度合いにおいてはとても大きな違いが存在した。第5学年と第8学年を中心に考察を重ねてきたわけであるが、そのほかの学年を見渡すと、実科学校は「音楽聴取」において第7～9学年に「ポップスとロック」、第8～9学年に「オペラ」、第10学年に「宗教・世俗音楽」のテーマ学習がある。また、「電子楽器の音楽」、「映画と広告の音楽」等を含む6つのジャンルの選択肢から2つ選んでテーマ学習を行うようにも設定されている。このようなテーマ学習の導入は基幹学校には見られないものである。また、基幹学校の指導内容は全般にわたり、ギムナジウムの同学年に見られるような専門知識の習得は少ないと言えるものであった。他方、第8学年から題材・単元制をとるギムナジウムにおいては、第8学年で3題材・単元、第9学年からは概ね6題材・単元程度が設定されており、活動領域に「音楽知識の応用」が加わることも含めて、その細分化、深化された内容は他の学校種には見られなかったものであった。

以上をまとめると次のようになる。

- ① 3つの学校種は共通した教育理念をもつ。
- ② 3つの学校種は共通して、学年が進むにつれ「歌唱・音楽すること」よりも「音楽聴取」や「理解」に重点が移行していく。
- ③ 基幹学校→実科学校→ギムナジウムとなるにしたがい、指導内容はより細かく、より高度なものとなり、専門性が高まっていくことが学校種間の大きな差異と言える。

註

- 1) ドイツの教育課程の基準は州ごとに異なる。本稿では次に掲げるものを基礎資料とした。
KULTUS UND UNTERRICHT, AMTSBLATT DES MINISTERIUMS FÜR KULTUS UND SPORT, BADEN-WÜRTTEMBERG, Stuttgart, den 21. Februar 1994, 文化と教育, 教育スポーツ省官報, バーデン・ヴュルテンベルク州, シュトゥットガルト, 1994年2月
なお、本稿における原文の和訳は全て筆者が行ったものである。
- 2) 州ごとに設定される教育課程や学校制度については、拙稿「ドイツ(Baden-Württemberg 州)における教科横断的学習に関する考察 ―音楽科カリキュラムを視点として―」の pp. 37-39 を参照されたい。
- 3) この州のカリキュラムの大きな特徴である「教科間を結びつけるテーマ(Fächerverbindende Themen)」に関しては、拙稿、前掲書[2], pp. 39-44 を参照されたい。
- 4) ギムナジウムの題材・単元の詳細については、中島卓郎 佐野 靖、『音楽のカリキュラムの改善に関する研究 ―諸外国の動向―(ドイツ)』、『(教科等の構成と開発に関する調査研究) 研究成果報告書』の pp. 47-50 を参照されたい。
- 5) 各学校種における学年ごとの年間時間数の詳細は、前掲書[4], p. 44 を参照されたい。

参考文献および参考 URL

- 1) KULTUS UND UNTERRICHT, AMTSBLATT DES MINISTERIUMS FÜR KULTUS UND SPORT, BADEN-WÜRTTEMBERG, Stuttgart, den 21. Februar 1994, 文化と教育, 教育スポーツ省官報, バーデン・ヴュルテンベルク州, シュトゥットガルト, 1994年2月
- 2) <http://www.leu.bw.schule.de/allg/lp/index.htm> (バーデン・ヴュルテンベルク州教育プラン)
- 3) 中島卓郎 佐野 靖、『音楽のカリキュラムの改善に関する研究 ―諸外国の動向― (ドイツ)』、『(教科等の構成と開発に関する調査研究) 研究成果報告書』, 国立教育政策研究所, 2003, pp. 41-55, p116
- 4) 中島卓郎 中島奈穂子, 「ドイツ(Baden-Württemberg 州)における教科横断的学習に関する考察 ―音楽科カリキュラムを視点として―」, 信州大学教育学部紀要第 111 号, 2004, pp. 37-44
- 5) 文部科学省生涯学習政策局調査企画課, 「諸外国の初等中等教育(ドイツ, 2002年1月)」

(2004年12月15日 受理)